

# 琉球大学学術リポジトリ

## [会員の広場]ゲットウ見聞記

メタデータ	言語: 出版者: 南方資源利用技術研究会 公開日: 2014-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 米盛, 重保 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017269">http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017269</a>

## 会員の広場

### ゲットウ見聞記

米 盛 重 保

(琉球大学農学部)

平成元年度から(財)地域産業技術振興協会の委託を受けてゲットウの栽培及び成分特性に関する研究を行っている。ゲットウの自生地を追って、北は鹿児島県の佐多岬から南は波照間島、与那国の南西諸島を訪れ、ゲットウの調査、採取をする機会に恵まれ、各地におけるゲットウの分布状況、系統(品種)、呼び名(方言名)、利用法等に地域性が見られ興味ある話題を聞くこともできた。そのいくつかを紹介したい。

#### 南大東島のゲットウ

南西諸島でゲットウの分布が最も多いのは南大東島だと思われる。畑の周辺は殆どがゲットウで囲まれ大群落が見られる。サトウキビの結束材料として葉梢が柔軟で切れにくい優良種を台湾から導入したと言われている。不思議なことに沖縄本島で見られるゲットウ(*Alpinia spesiosa* K. Schum.)は殆ど見られずタイリングゲットウ(*Alpinia uraiensis* Hay)ばかりであった。タイリングゲットウは普通のゲットウよりやや大型で茎長が2.0m~2.5m 葉数10~13枚 茎重(生)700~900gで柔軟である。タイリングゲットウの花の形態、開花時期はゲットウと同じであるが結実しないのが大きな特徴である。染色体が三倍体かも知れない。ゲットウの呼び名も独特でソウカと呼んでいる。ショウガ→ショウカ→ソウカになったもので八丈島からの移民によってこのように呼ばれるようになったようである。

#### 種子島のゲットウ

南大東島のゲットウは人工的に手を加えて残された群落であろうと思われるが、種子島のゲッ

トウは人間の手の届かない自然の状態でかなり分布している。島の北東部の海岸沿いの傾斜地は最も多く、クマタケラン、アオノクマタケランと混在しているのも特徴的である。沖縄本島以南の琉球列島では見られないクマタケランの自生地がかなり分布しているのもめずらしい。種子島では佐多岬、奄美大島と同じようにゲットウをサネンと呼んでおり、葉をサネンバ、シャネンバと呼んで黒糖アメの包材に利用されている。

#### 佐多岬のゲットウ

ゲットウの自生地の北限として知られている。ここでもゲットウ、クマタケラン、アオノクマタケランが混生しており、琉球列島では見られない植生がのこっている。佐多岬一帯ではゲットウをメジャネン(雌ゲットウ)、クマタケランをオジャネン(雄ゲットウ)の呼び分けをしており、種子の稔実が多いゲットウをメジャネン、少ないクマタケランをオジャネンと呼ぶそうである。ゲットウの利用はモチの包材として葉を利用しているが、ごく少量で、鹿児島市内のモチ業者の利用が多くなってきているようである。本土で唯一の自生地であるため貴重な観光資源植物として保存されている。

#### サンニン(方言名)由来

南西諸島におけるゲットウの方言名は南大東島のソウカを除くと殆どがサネン、サンニン、サーニ、サニ、サミンなどと呼ばれている。その由来について〔林政八書〕によると〔砂仁<sup>シヤニン</sup>〕すなわち中国の漢方薬〔縮砂仁<sup>シヤニン</sup>〕に似ていることによるものと記されている。しかし、筆者ら

の現地での古老の話によると、サンニン〔三年〕、すなわち、植え付け後開花し、成熟するまで3年を要することから呼ばれた方言名と聞かされた。実際の栽培試験でもゲットウは初期生育が緩慢で開花までに3年を要する植物である。縮砂仁の原料植物であるシュクシャがわが国で自生、栽培の無いことや、ゲットウの生理的特性から判断してサンニンの由来は〔砂仁<sup>シヤニン</sup>〕よりも〔三年<sup>サンニン</sup>〕の方が妥当と思われるがいかがだろうか？